町村新報

發行日　毎月二回　不定日發行
編輯兼印刷發行人　酒井秀吉
發行所　福島縣石城郡磐崎村大字下湯長谷勝善三十八番地　町村新報社
定價　一部金七錢（郵稅共）一ケ月十四錢半ケ年八十錢一ケ年壹圓五拾錢
廣告料　五號活字十二字詰一行金二十錢　別色刷　四十錢

悲慘な婦人勞働【二】

投稿者　野木圭太郎

ヅンヴースト嬢は勞働をおへてから夕食の用意してある食堂へ歸つてきた。それはむき出しの木製の食卓の上に備へられてをり、腰掛もまた同樣の板であつた。テーブルには三つの大皿が載つてゐた。一つの魚と獸肉と骨とをませ集めて臭いソースをぶつ掛けたもの一つは壚豚、そして今一つは玉蜀黍が盛つてあつた。食卓の話題は妬み深い二人の婦人の喧嘩に落ち込んだ。

ヅンヴオースト嬢と共に寢ることになつた少女は、あまり疲れてすぐには眠れないといふ事を彼女に訴へたまた病氣の時には一日家に留まつてゐるのであるがその時には監督がやつてきて無理にも仕事に出掛けるまでは、いつまでも執拗にいぢめちらすといふ事を話した。その少女は疲勞し困備し切つてゐるやうに見えた

彼女に隣り合せたベットには子持の婦人が寢てゐた。彼女は病氣であつた、しかし彼女が初めて工場にきた頃はまだ壯健であつたといふ。しかし工場が……工場が彼女を殺したのだと彼女は考へてゐた。『あなたは吾々の飲み水を御覽になりましたか、あれは全く毒藥です、その中にはありだけのものが交つてゐます』彼女はこんなことも言つた。お醫者はもう私の所いは來ては吳れないでせう、お醫者だつて私をどう助けようもない』ヅンヴオースト嬢は又美しい少女が仕事を求めに來た話を聞いた。監督はさういふ綺麗な少女の爲めにはいづも働くのだといつて、彼女を自分のものにするために傭ひ入れた。

老婦人の中には朝食を工場に持參して埃だらの床の上に坐つて、仕事が始まる前にそれを食ふのもある。彼女は髮もけずらず、臭くて穢らしくやつれはて、疲れ切つてゐるやうに見えた。朝の起床は非常に早い、五時のサイレンと共に起きて朝飯を濟まし六時には工塲に出掛ける。十三時間の勞働を終へて歸宅した彼女等は疲れ切つて何も食べずにその慘めなベットに身を投げかける。

それから警察では女工を恰かも淫賣婦の如くに考へてゐるか言語に絶した取扱ひをする作者は暫く那須温泉に遊浴して居つた時近つきになつた一女工の告白を書いで見よう。

モスリン××工塲竹の十九號室で部屋長が現金六十餘圓を何者にか竊取された。寄宿舍では時々こんなことがあるが、大抵とられた者が惡いと言ふ筆法で内密に人事係が裁いて了ふ習慣だ併し乍ら近頃餘り盜難が頻發する故、一度訴へておいた方がいゝと言ふので警察署へ訴へたら早速刑事がやつて來て取調べの際彼女をとらへて散々打擲しながら言ふのであつた。

『おい！お前この着物をどこから盜んで來た』

『いゝえ盜んでなど來やしません、働いて拵へたのです』

『生意氣な事を言ふな、女工がこんな絹の着物など入るものか、たしかに盜んだに相違なからう。どこで取つたか白狀しろ』

こう云つてはしたゝか打つ

『お前 この時計どこでかつぱらつた』

『いゝえ あたしが買つたのです』

『女工に 時計や指環が入るものか』

『強情はると 爲めにならんぞ、人間はみんなものを持つやうになつては終まゐだこれは令孃か淫賣婦の持つものじやないか、お前達持のつものじやない』

彼女は餘りの口惜しさの餘り泣いた。

『こら白つぱくれて どうあつても白狀しないな、よしそんなら仕方がない、連れて行く』

刑事は引き摺るやうに拘引し、つひに彼女を一晝夜の拘留に處した。一方その部屋のうち彼女の友達は皆な彼女が品物を買つた店も知つて居れば餘りに無慘なしうちに憤つたのである、然るに驚くべし女工監督の任に當る世話係の一人であつたのではないか、しかも盜人は寄宿舍主任の妾といふ話だ。こんなにして彼女が嫌疑をかけられあまつさい虐待しられた原因はと聞いたならば、多くの衣裳や裝身具を所持してゐたからである。

女工がオペラバックを持ち耳隱しに結つちや惡いと何時の昔に誰れがきめたか。常に警察は資本家の警察であるが如く、決して弱者に公平であり得ないことは近頃の勞働爭議に明らかである。

彼女等はかくした虐待に虐待をかさねて愛の生産をいとなんで居るのである、かゝる種類の生活をする者に殘されてゐる快樂はたゞ一つしかない。それはどんな種類のものであるかは容易に想像が出來る。彼等もまた、畢竟肉と血とによつて動物ではなきか彼女等は謂所工塲結婚といふものに身を委ねる、それには何時の法律上の形式をふむ必要はない。少女等は母親となり、彼女が夫と呼んだ男からは見捨てられてしまう、もし子供が生れゝばその子もまた同じ紡績工塲で働くやうになるであらう。して母親は…………？　然しもう彼女については言ふ必要はあるまい。

この町の人々はかういふ婦人等を輕べつしその不道德な生活を彼女の罪として責めるのである常に彼女達は唄つて居る。

『寄宿流れて工塲か燒けて門番コレヲで死ねばよい』

さうでも無い限り自由が得られないと思ふ彼女達の心根の哀しくもいぢらしさよ……！だが何と力強い歌だこの唄を聞いた時は何時もさう感じる。

優しい世の親達よ………
私は御身達に訴る
彼等悲慘なる境遇から
救ふ道は無きか。と
世の人々よ評を乞ふ　（完）

一九三〇、四、五
上湯長谷自宅にて

平町民諸君に告ぐ
地方發展に心眼を開け
公園の增設と競馬場の開設

部落がある、農民がある、農產物が出來る、生活必要品や嗜好品の需要が起る、從つて物質の集散は主として近隣の都市が中心となつて行はるゝは知れて居る、當地方に於ける街は、平町湯本、植田、四倉等は今の處到底平町に比すべくもない、築港完成后に於ける小名濱町の發展は想像の限りでないが平小鐵道の敷設を見ば、其繁榮は平町に及ぶは火を賭るよりも明かである、炭坑方面の關係も甚大の影響あるが、然し之は將來の年限が限られて居る、未來永劫出產を見るべき筋合のものでない、何時かは沒落葉すべきもので、榮枯盛衰の速かなるを吾人に示す代表的のものである、然れば將來町の繁昌は一に他の方面に係るもので周圍の町村を發達せしめねばならない、其と共に町としても設備も整へる事が必要である、水道の出來たのは最もよい、先日春未た早き時處用あつて平町へ行つた。先の都合で二三時間を他に費す事になり市内をブラ〳〵した。いくらゆる〳〵歩くも一間時とかゝらない、松ケ岡公園は余り高く且つ何等見るべきものがない、此所に於て吾人は平町に而も南方にある大平面地に平坦なる公園を作り四季折々の花卉を植ゑ運動塲を設け少なくも半日の樂しみをなすの塲所たらしむる事は最も策の得たものと思ふ、町民諸君の保健の爲にも是非必要と信ずる、誰か率先して之をなす者はないか一体當地方人は進取の氣に乏しい公共的共同心が足らない、目先丈に奔命して居る感がある、公衆のために一肌を脱がれん事を望む、尙其外廊に競馬塲の設置をしたら如何のものか、其の法律は知らざるも當近傍には設けなく、且つ地方には產馬の地あり、馬匹の奬勵にもなり、春の櫻花と共に平の一名物となし、大に全國的に群衆を吸集するには是以外妙案奇策なしと思ふ、緊褌一番、公園の增設競馬塲の開設に努方するの識者の出でん事を切望するものである。

募集

各町村駐在記者
希望者ハ自筆履歷書
御送附ヲ乞フ
町村新報社

銘酒太平盛鯛釀造元
西本田屋
磐崎村下湯長谷

材木製材
矢吹材木店
湯本町